

中部ウーマンズ・ボードの自立への動き

——アメリカン・ボードとの関係において（一八六八一—一九一〇）——

石 井 紀 子

中部ウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions of the Interior、略称 W. B. M. I.) はアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions、略称 A. B. C. F. M.) の女性による独立した法人組織として、一八六八年から一八七三年にかけて結成された三つのウーマンズ・ボードの一つである。中部ウーマンズ・ボードはシカゴに本拠地をもち、中西部の会衆派の中流白人女性の力を結集し、トルコ、ブルガリア、ギリシア、メキシコ、ミクロネシア、中国、インド、日本、南アフリカ、及び米国西部のダコタ地方に女性宣教師を派遣し、女性による宣教活動を行った。一九二七年一月に他二つの東部ウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions、略称 W. B. M.) と太平洋ウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions of the Pacific、略称 W. B. M. P.) と共に、アメリカン・ボードに統合されるまで、五八年にわたる事業活動を行ったのである。日本では、神戸女学院、神戸女子神学校 (現聖和女子大学)、頌栄保母伝習所、同幼稚園 (現頌栄保育学院、頌栄短期大学) を支援していた。¹⁾

この三つのウーマンズ・ボードの派遣した女性宣教師が明治期の日本の女子教育の発展に大きな貢献をしたことは、広く知られている。しかしながら、アメリカン・ボードについての研究が豊富なのに対し、ウーマンズ・ボードの研

究は、驚くほど少ない。⁽²⁾ 本稿では、中部ウーマンズ・ボードの年次報告のほか、日本ではこれまで知られていなかった、アメリカン・ボードとの書簡を含む中部ウーマンズ・ボードの資料や、東部ウーマンズ・ボードの資料をもとに、中部ウーマンズ・ボード設立までの経緯と、設立から一九〇年代初頭までの間にアメリカン・ボードから自立性を強めていった動きについて概観したい。⁽³⁾

一 中部ウーマンズ・ボード設立までの動き

南北戦争以降、一八六〇年代から一八七〇年代初頭にかけて、数多くのプロテスタント教派で、女性独自の組織作りが行われた。最初の女性宣教団体は、一八六一年にトーマス・C・ドレムス夫人の率いる超教派が設立した女性合同宣教協会 (Woman's Union Missionary Society of America) であった。南北戦争後、アメリカン・ボードを補助する組織として一八六八年一月に東部ウーマンズ・ボード、同年十月に中部ウーマンズ・ボードが設立された。これは、教派別の女性の組織としては初めてのものであった。一八六九年にはメソジスト監督派、一八七〇年には長老派がアメリカン・ボードより独立して独自の組織をつくり、一八七一年には、バプテイス特派が東部と西部に二つの組織を設立した。翌一八七二年には聖公会が、一八七五年には、オランダ改革派と続くのである。同年、太平洋ウーマンズ・ボードが中部ウーマンズ・ボードより分離独立した。⁽⁴⁾

そもそもアメリカン・ボードは、一八一二年マサチューセッツ州で登記された海外宣教のための法人組織であるが、ポストンの本部組織の幹部も派遣される宣教師も男性で構成され、女性の参加は長らく宣教師夫人に限られていた。

現地的女性と接触するためには女性宣教師が必要であることに早くから気付いている男性牧師もあったが、未婚の女性を海外宣教地に派遣することには、アメリカン・ボードの男性の間で、抵抗が根強く、一八六〇年までの間にアメリカン・ボードが任命した独身女性宣教師は、(宣教師補 assistant missionary という身分) 累計で一三七名、内一〇八名はアメリカ国内のインディアン保留地のミッションに派遣され、海外の宣教地に派遣されたのはわずか三〇名だった。実際には、海外ミッションより国内のインディアン保留地の方が危険に満ちていたのだが、アメリカン・ボードにおいて海外に独身女性宣教師を派遣することに対しての方が抵抗が強かった。また未亡人であったり、白人でない女性の方が抵抗が少なかったらしく、アメリカン・ボードの最初の独身女性宣教師として海外に任命されたのは、シャールロット・H・ホワイトという未亡人(後すぐ結婚した)であり、未亡人でない独身女性宣教師としての第一号は、一八二三年にハワイに派遣された黒人女性、ベッツィー・ストックトンであった。アメリカン・ボードの書記ルーファス・アンダーソンの独身女性宣教師派遣への反対は一八六〇年になっても変わることなく、最初の独身女性宣教師が派遣されてから数十年経つにもかかわらず若干名しか任命されず、また二級の宣教師扱いであった。⁶⁾このような背景の下に独身女性宣教師を派遣する目的で女性独自の宣教団体を設立する機運が女性の間で高まってきたのだった。

このように教派にかかわらず、海外宣教の分野で、女性だけの組織作りの動きが活発になってきたが、実際に女性を中心とした組織作りが実現するまでの道のりは平坦なものではなかった。アメリカン・ボードで一八六八年にウーマンズ・ボードと中部ウーマンズ・ボードが実際に設立された際には、一八六六年にアメリカン・ボードの渉外担当書記(Foreign secretary)にN・G・クラークが就任したことが大きく関与していると考えられる。神戸女学院所蔵の『ナサニエル・ジョージ・クラーク追悼記念』(ボストン、一八九七)によれば、「教会の女性の間で女性独自の

ボードをつくり、もっと効率的に宣教に協力したいという提案がされたとき、N・G・クラークより年長のアメリカン・ボードの書記のほとんどは、これを支持しなかった」こと、そして最初の段階で「唯一この事業に賛成した書記」がクラークであったこと、「クラークの前任のルーファス・アンダーソンは、「もはや（女性のボードをつくるという）この実験は避けられない道だが、その担当が自分でなく、君で良かったよとクラークに述べた」ことを記している。

アンダーソンは、よく知られているように、そもそも独身女性宣教師の派遣に断固として反対する保守派であったので、女性の組織化には否定的であった。一八三四年に初めて女性だけによる組織化の機会が到来しかかったとき、これを阻止したのが、アンダーソンであった。すなわち、この年に中国から帰国した宣教師のデビット・アピールが、「現地での宣教を成功させるためには、現地の女性に近付くのが急務で、そのためには、クリスチャンの女性を現地に派遣しなければならない」旨をニューヨークで訴えた。この演説に深い感銘をうけた、トマス・A・ドレムス夫人が女性のボードを設立に動き出したところで、アンダーソンの反対を受け、やむなく断念した経緯がある。

なお、アピールがニューヨークに帰路立ち寄ったイギリスのロンドンでは、この要請に応じて、同年「東洋女子教育振興協会」(Society for Promoting Female Education in the East) が結成されたが、アメリカ合衆国では、先のドレムス夫人が、超教派の「女性合同宣教師協会」(Woman's Union Missionary Society) を結成する一八六一年まで二七年を要した。これがアメリカで初めて単独で法人資格をとった女性による海外宣教の団体である。

一方、アメリカン・ボードの教派である会衆派の女性達も早くから女性のボードを結成する需要が内外で高まっていることを熟知していた。実際、アピールの訴えのあと、教会毎に海外宣教を支援する女性の会が各地に多数でき、その最古のものは、デトロイトの西のロックフォード第一会衆派教会に一八三八年五月に成立したものだと言えられ

る。⁸が、アンダーソンの反対を承知していた会衆派の女性達は、一八六六年にアンダーソンが辞任するまでは特段の動きを示さなかった。

後任にクラークが就任すると、彼は女性独自のボードの結成は流れの中で不可避と認識し、むしろ女性のボードをアメリカン・ボードの宣教計画の中に組み込みたいと考えていたので、就任と同時に女性の宣教団体のことも独身女性宣教師の活動も積極的に支援した。この機を捉えてマサチューセッツ州チャールストンのアルバート・ボウカー夫人は、クラーク書記を訪問すると、「宣教活動に女性（の参加）を激励するため、何かをしなければなりません」と要請した。⁹このような動きの高まりの中で、一八六七年四月十九日にクラークがウーマンズ・ボードの設立を提案し、一八六八年一月には、アメリカン・ボードの補助組織として、ボストンに東部ウーマンズ・ボードが結成されたのである。

これに続いて同年十月シカゴに中部ウーマンズ・ボードが結成された。これは地方にボードがあれば、個々の女性の個人的な参加を促し、宣教活動へ、地元の関心を喚起するのに効果的と考えられたからであった。シカゴの女性達は、他用でクラークがシカゴを訪問する機を捉えて中部地域におけるウーマンズ・ボードの設立を企てたのである。クラークの訪問に際し、シカゴにあるすべての会衆派および長老派の教会の牧師夫人と中西部の州で指導的立場の牧師夫人百名に招待状が出され、内六十名以上の出席を得て、一八六八年十月二十七日にシカゴの第二長老派教会の講義室でクラークは講演を行った。その中で、宣教地での女性の仕事の必要性と方法論を示し、女性独自のボードを結成する利点について次のように自分の見解を述べた。

現地ミッションでの仕事に自ら参加することによって、そして現場の女性宣教師と手紙のやりとりをすることによって、宣教活動にもっと直接的で親密でかつ深い関係を築くことができます。私が女性宣教師の信認を得ようとどんなに努力したところで、

彼女たちは、私に書く手紙よりずっとあなた方女性に打ち解けたものを書くでしょう。彼女たち（女性宣教師）は、ヘラルド（アメリカン・ボードの機関誌「ミッシュヨナリー・ヘラルド」）に載るのを恐れているのです。……生き生きとした様子、感動的な出来事、自分たちの喜びや悲しみといった内面にある心情を自由に、心をこめて正直に表現できるのは、同性に対してだけです。

クラークが退席したあと、この女性達は、S・C・バートレット夫人とJ・V・ファーウェル夫人をそれぞれ議長、書記として、ウーマンズ・ボードを結成することを議決し、一八七三年十一月十三日にはイリノイ州より法人資格を得て、ここに中部ウーマンズ・ボードが正式に発足したのである。

このような中部ウーマンズ・ボードの設立までの流れを歴史的に振り返ってみると、一八六六年のクラークの書記就任が、アメリカン・ボードの対女性政策を転換させる一つの大きな分岐点となったといえよう。クラークが書記に就任した後、アメリカン・ボードは高まりつつある女性の力を海外宣教へ向ける必要性を容認するようになったのである。N・G・クラークは女性の組織化の動きは、アメリカン・ボードの宣教活動の発展に貢献するとみて、ウーマンズ・ボードを最初から支援した。晩年「回顧」（“A Retrospect”）という論文のなかで、クラークは、ウーマンズ・ボードの結成が「（自分の）初期の（仕事の）最大の出来事であった」と述懐している。結成前は、「海外宣教の仕事の中で、女性の重要な役割については、一般的に認識されていなかった」とし、「ボードの偉大な仕事は始まったばかりで、女性に伝道できない限り、仕事の完成は見込めなかった」と確信していたので、女性達の間から、ウーマンズ・ボード結成の動きが出てきた時、彼は、「この新しい動きを大歓迎して、自分の力の及ぶ限り喜んで支援した」と述べている。

もつとも独立したウーマンズ・ボードをアメリカン・ボードのなかで支援した男性は、クラークだけではなかった。

エチオピアのガブーン・ミッションの宣教師であった、ブッシュネルは、一八七〇年に中部ウーマンズ・ボードの第二回年次総会の夜の部会に出席して、ウーマンズ・ボードの義務は次のように考えたと発言した。

女性は集金の仕事で……良い結果を生み出すことができる。また人々の間に宣教の意欲を喚起し、大衆の関心事とすることができる。また、クリスチャンの母親たちに、子供たちを幼いときから宣教の仕事に捧げるよう説得できる。さらに現地の異教徒の間でも異教徒の家庭に男性より入り易いため、男性より成果をあげ易い。¹³⁾

ブッシュネルは女性が男性より宣教の仕事に適していることも多々あり、特に「ほとんどのミッションで独身の若い女性宣教師を必要としている」とアピールした。中部ウーマンズ・ボード第二代会長エミリー・ホワイト・スマイス¹⁴⁾は一八六〇年代は、「女性が家庭の外で行う活動について極端に保守的な一般感情が、ときには、道をふさぐ花崗岩の壁のように」強固でゆるぎなかったと伝える。¹⁵⁾このような時代背景を考慮すれば、当時のクラークの女性観はとりわけ柔軟で、開明的であったといえよう。¹⁶⁾

ただし、このようにクラーク書記の女性観が同時代人の中では、開明的であったと評価されるとはいえ、これには一定の留保が必要であろう。例えば、神戸女学院で教育内容の質を高めることに野心的であったヴァージニア・A・クラークソンや高等教育を熱望したエミリー・A・ホワイト・スマイス、カレッジ構想を追究したエミリー・M・ブラウンやメアリー・アナ・ホルブルックといった女性宣教師が抱いていたように、女子教育も伝道も女性の発展をもたらすという意味で同義的であり、両者は密接不可分である、と考えていた女性観とは異質のもののように思われる。このことは、クラークソンの野心に警鐘を鳴らしたクラークの書簡によって知られる。

私たちの第一の大事な目的はクリスチャンの人格を育てることであり、その基礎としてちょうど必要なだけ、様々な分野の知識の研鑽を積むことです。……貴女の学校を全てにおいて一級にしよという野心をもつと、多くのことに手を広げすぎること

なり、到底養成できかねます。私たちの仕事の唯一の崇高な目的、すなわち、女子にキリスト教教育を行うことを常に心に留めていざなひ⁽¹⁶⁾。

後にクラークが神戸女学院でカレッジ増設に同意を示したのは、日本女性の間には高等教育への強い要望があるという宣教師の報告に対応しようと思ったこと、日本女性の間には指導者を養成する必要を認めたこと、そして、アメリカ本国の女子高等教育機関へ日本の女子学生を送るより、コストが削減できると考えたのが主たる理由と考えられる⁽¹⁷⁾。

二 中部ウーマンズ・ボード設立初期の動向

中部ウーマンズ・ボード発行の『Missionary Papers No. 9』(一八六八年十一月)は、設立の決議文の中に、この組織の目的を次のように記した。

アメリカン・ボードと協力して宣教に関する情報の伝播、及び中部諸州にできるだけ広く(宣教活動への)関心と情熱を高めるという特別の目的のために、女性の宣教団体をシカゴに結成するべきである⁽¹⁸⁾。

さらにこの時採択された最初の綱領には、次のように記された。

第一条 この団体の目的は、クリスチャンの女性の熱心で組織的な協力をもとに、アメリカン・ボードの機関を通して、異教徒の女性たちに独身女性宣教師を派遣し、宣教師と現地の教師及び伝道者(Bible readers)を支援することである⁽¹⁹⁾。

この設立会議の議長を務めた初代会長のS・C・バートレット夫人は中部ウーマンズ・ボードの宣教活動の意義を説明して次のように述べている。

この仕事は他の何よりも、全てのクリスチャンが心から一致できる仕事です。西洋の女性は天から恵を授けられています。心の広い西洋の女性は、この天恵を、全てをキリストに捧げた外国の姉妹や、神の目からみれば、やはり私たちの姉妹に違いはないけれども、無知と異教の重たい鎖に繋がれて品位を落とした女性たちにも施すため、その道筋を提供するのです。²⁰⁾

中部ウーマンズ・ボードは、一八七〇年の長老派の分離や翌一八七一年のシカゴの大火災等の苦難にもかかわらず、宣教師の人数、集金総額、傘下組織 (auxiliary) の数のいずれをも着実に伸ばしていった。早くも一八七五年にはアメリカン・ボードが中部諸州から受け取った集金額の約五一・九六%を、中部ウーマンズ・ボードの集金総額が占めた。²¹⁾ 最初の十年で宣教師三五名を派遣し、中部諸州に六六九の傘下組織と九支部を結成し、海外宣教地では四校の寄宿女学校を任せられた。この間、トルコ、中国、インド、南アフリカ、日本、アメリカ西部のダコタ地方で、寄宿制女学校を中心として活動し、次の十年間で、現地の女性の間にはバイブル・ウーマンを養成する仕事を加え、一八八八年以降は、時代を経るにつれ、幼稚園教師の養成や、女子の高等教育、医療事業や孤児院、授産学校 (実業教育) 等福祉事業まで、事業の多様化を進めるなど、積極的に事業を拡大していった。²²⁾

しかしながら、このように女性を中心にして設立、運営されていった中部ウーマンズ・ボードの活動の道のりも順風満帆なものではなかった。当時は女性を中心した活動への強い偏見などがあり、後になってみれば当たり前となつたような事柄も、大きな障害となっていたので、課題を一つ一つ克服していかなければならなかったのである。

このような初期の苦勞について、エミリー・A・ホワイト・スミスは『中部ウーマンズ・ボードの五十年間の回想録』 (“Reminiscences of 50 years of WBMT,” 1918) の中で次のようなエピソードと共に伝える。

例えば、中部ウーマンズ・ボードが設立された当初、女性が「男性も混じっている聴衆の前で発言すること」は文

化的社会的通念としてタブー視されていた。これは、聖パウロが女性が説教したり教えることを禁じたことに由来するという。²³ スミスは、「一八六九年に男性が出席している会合で発言したり、祈りを捧げた女性は『女性らしくない女性』という不愉快なレッテルを貼られた」と伝える。

こうしたタブーを破る分岐点は一八七三年の年次総会の時に来た。問題となったのは、年次総会の一環として、中部ウーマンズ・ボードが男性も参加できる夜の部会を開くべきか否かという点であった。年次総会は本来午前午後部の部会で構成され、女性のみが出席するものであった。それに対して夜の部会は前述した第二回年次総会でブッシュネルが発言したように臨時に男性のゲスト・スピーカーの話聞く時に開催されたい。「男性が出席している会合で女性が司会したり、発言することはきわめて不適当」とみなされていた当時の社会通念を尊重して、それまで、公式には年次総会で、男性も参加できる夜の部会は一切開かれていなかった。しかし、一八七三年の年次総会の会期中に、ラシーヌ教会のピアス牧師は、ペロイト大学のチャピン学長を自分の教会に招き、中部ウーマンズ・ボードの年次総会のプログラムに調和したテーマでスピーチを依頼し、中部ウーマンズ・ボードの幹部に夜の部会を開催する可能性について検討させる機会を与えた。これに参加した中部ウーマンズ・ボードの代表たちは、これをよしとし、年次総会に夜の部会を加えれば、もっと興味深いものとなり、影響力を増すと考えた。しかし、この日の時点では、チャピン学長は「男子禁制」の中部ウーマンズ・ボードの政策を支持し、男性を含めた夜の部会を開催することには反対していたのである。

しかし、その翌日、中部ウーマンズ・ボードの午後の部会が始まると、女性幹部が驚いたことに、チャピン学長と先の牧師をふくむ四人の男性が部屋に「静かに入り」部会を傍聴した。スミスを含め、誰も、それまでのならわしのように、この男性たちに退室を要請するものはなかった。部会が終わると、チャピン学長は壇のところにきて、「午

後の部会が『適格な品位』を保ち、価値あるものであったことを、認めてその喜びを伝えた。」この経験を経て、男性も中部ウーマンズ・ボード会議に参加してよいものと彼は考えを変えるのである。これ以来、男女同席の会議に女性が発表することが許されるようになった。

そして翌年のセント・ルイスでの年次総会のプログラムに、中部ウーマンズ・ボードは、エミリー・ホワイト・スマイスの司会で、メキシコから帰国した女性宣教師がスピーカーとなる、男性も出席できる夜の部会を組み込んだ。「総会を企画した幹部は、『婦人参政論者』と呼ばれた」が、中部ウーマンズ・ボードが恐れていたほどの批判は受けなかった。それ以来、毎年、年次総会には男女の聴衆が参加し、中部ウーマンズ・ボードの女性の会長が司会する夜の部会も開かれた。²⁴このように今では些細に思われる事柄でも当時にあつては当たり前ではなく、ボードのメンバーが努力しながら勝ち取っていったのである。

こうした女性の組織活動に対して保守的な夫たちが偏見と恐れを抱いていたため、初代会長のS・C・バートレット夫人が一八七一年の年次総会直前に辞任すると、後任の人選は難航することになった。年長の牧師夫人たちは、夫の強い反対にあつて、会長職を固辞したのである。このため、結局、シカゴに引越してきたばかりで、常に妻の社会活動を支援する夫をもつ若い牧師夫人のエミリー・A・ホワイト・スマイスが会長職に就いた。スマイスはこうした「長年にわたる文化的規範」が「私生活の中でのみ、育むことのできる仕事への情熱や広げて理性的な視野を創りだすのを不可能にしている」と感じた。²⁵

また「些細なことであるが、聡明な自尊心のある女性にとって聞くに耐えないほど無礼な発言もあった」とエミリー・A・ホワイト・スマイスは伝える。

ある(アメリカン・ボードの男性)書記は頬に涙を流しながら、公の会議で“Dear Ladies”の行っている仕事について話した。私たち(スミス)は“Dear Ladies”などと呼ばれたくないし、なぜ彼が泣いているのかその原因が全くわからなかった。別の(男性)書記は、機会あるごとに、女性は頑強なオークの木にまといつく、つる植物のようなものであるし、そうあるべきだと告げた。²⁶

中部ウーマンズ・ボードが設立されて八年経た一八七六年から七七年にかけても、「中部ウーマンズ・ボードの幹部や宣教師が教会の壇上にたち、公の席上で発言すること」は依然として論議的であった。会衆派の男性たちの間で広まっていたのは、女性による宣教活動は、実は、婦人参政権運動を仮面で隠しているだけで、「真の女性らしさ(“true womanhood”)を損なう大きな脅威」ではないかという危機感であった。こうした男性にとって、女性宣教師が「男性の混じった聴衆(mixed audiences)の前で発言」したり、中部ウーマンズ・ボードの会合で、「司会の女性が説教壇にたち、賛美歌を読み……あたかも牧師のように、牧師たちを呼んで、祈りを捧げさせる」のは、「ピューリタンの女性を失った」も同然であったと見られていた。²⁷

女性が自分たちの範囲を逸脱しているのではないかという危機感がアメリカン・ボードの男性の間で、募っているのに鑑みて、クラーク書記は、一八七八年一月ウーマンズ・ボード全般とアメリカン・ボードの関係を明らかにする必要を感じた。クラークはウーマンズ・ボード全体の賢明な経済、慎重な経営、無償で働く女性の献身、そして、アメリカ本国に住むクリスチャンの女性と彼女たちが支援する宣教師との間に育まれる個人的な関係を賞賛した。しかし、同時に海外ミッションにおけるウーマンズ・ボードの全ての仕事は、アメリカン・ボードの運営委員会(Pride-nial Committee)の所管にあると付け加えた。予算の配分、宣教師の任命と配置そして、宣教師の活動は、全ての運営委員会の指揮監督下で行われたのである。²⁸

クラーク書記は、一八七三年の中部ウーマンズ・ボードの綱領にはじめて正式に明記されたアメリカン・ボードと

中部ウーマンズ・ボードの役割分業を再度確認したのだった。

アメリカン・ボードの書記と運営委員会で、(中部ウーマンズ・ボードの)顧問委員会を構成し、全ての宣教師候補は当該ボードが任命する前に、(アメリカン・ボードの)運営委員会に照会し、その承認を得るものとする。当該ボードに支援される宣教師には、(アメリカン・ボードの)通信書記に頻繁に報告することを求める。⁽²⁹⁾

このように、設立初期においては、中部ウーマンズ・ボードには宣教師の任免に裁量は与えられなかった。中部ウーマンズ・ボードは宣教師を「採用(adopt)」するだけで、宣教師の財政的、精神的支援を引き受けたが、完全に権限を持つものではなかった。設立後当初の約十年間は、女性が例えば祈禱会のように何かの目的のために教会で計画的に女性の組織を創ろうとすると、たとえそれが僅かなものであってもアメリカン・ボードの保守派の男性の抵抗に会い、その実現は難しかったのである。⁽³⁰⁾

三 中部ウーマンズ・ボードのアメリカン・ボードに対する自立性の拡大

中部ウーマンズ・ボードは、アメリカン・ボードに対していかなる立場にあったのであろうか。

一八六八年の設立以降三十年にわたって、女子寄宿学校の運営を中心に活動し、一八八〇年以降は、それに現地伝道者養成も加えていた中部ウーマンズ・ボードは、前述のように世紀転換期以降、活動の多様化を進め、幼稚園教育、幼稚園教師の養成、高等教育、医療看護教育・事業、孤児院や天災、戦災の救済等福祉事業にも従事するようになった。このように事業の多様化、職種の専門化が進むと、中部ウーマンズ・ボードはアメリカン・ボードに対して、自立性を求めるようになっていった。中部ウーマンズ・ボードの活動には、独身の女性宣教師の派遣と支援、寄付金集

めと財政的支援、宣教活動に関する情報の収集と提供という三つの主たる業務があった。ここでは、宣教師の任地決定権をめぐるアメリカン・ボードとの論議及び未婚女性宣教師の結婚問題について、特に光を当てて、両者の関係の変化を見ることとする。

そもそも中部ウーマンズ・ボード設立時のアメリカン・ボードとの関係は曖昧であった。前述のように一八六八年十一月の現存する最古の中部ウーマンズ・ボードの綱領によれば、「クリスチャンの女性たちが、アメリカン・ボードの機関を通して、独自の女性宣教師を派遣し、宣教師と現地の教師及び伝道者 (Bible readers) を支援する」という³²⁾。また設立の決議文には、「アメリカン・ボードと協力するために、シカゴに女性の宣教会 (Woman's Missionary Society) を結成すると議決した」とある³³⁾。

R・ピアス・ビーバーは、女性宣教師団体とその教派の男性宣教師団体の関係を、「独立した法人組織だが、同じ教派の男性宣教師団体を補佐する形で協力するもの」、メソジスト監督派のように「完全に独立して、同じ教派の男性の宣教師団体と同等の立場にあるもの」と聖公会のように「男性の宣教師団体の一部門で完全にそれに従属するもの」の三類型に分類し、アメリカン・ボードの会衆派の場合は、その第一の類型としている³⁴⁾。中部ウーマンズ・ボードは独立した法人資格を持つ別個の団体であったが、アメリカン・ボードとの関係が定義上曖昧であったので、外部からは、なかなかアメリカン・ボードから独立したボードとして理解してもらえず、エミリー・A・ホワイト・スマイスはいらだちを隠せなかった。一九〇六年十月中部ウーマンズ・ボードがロックフェラー氏に特別に献金を要請する必要があったときアメリカン・ボードの幹部にロックフェラー氏への接触を依頼しなければならず、エミリー・A・ホワイト・スマイスはアメリカン・ボードの書記ジェームズ・L・バートンに「ボードとして直接、彼のところに行けないのに

は、正直申してかなり反発をおぼえます。」と不満をぶつけた。³⁴ また一九一〇年エジンバラで開催された、全キリスト教会の世界宣教会議への出席を希望したとき、その規約に、「本部組織のために集金活動のみ行っている下部組織は、代表として出席することは認められない。」という文を見つけて、中部ウーマンズ・ボードのM・D・ウィングは、バートンに「中部ウーマンズ・ボードはアメリカン・ボードの下部組織ではなく、協力しているだけで、独立した法人組織である」ことをイギリスの相手に伝えるよう依頼した。³⁵

このようにアメリカン・ボードとの関係が曖昧であったため、一九〇〇年代に二つの争点が浮上してきた。一つは宣教師の任地決定権であり、もう一つは独身女性宣教師の結婚問題であった。

従来宣教師の任地の決定は次の二段階で行われていた。まずアメリカン・ボードの運営委員会 (Prudential Committee) が宣教師の需要と供給を検討し、特定の海外ミッションに宣教師を任命した。次にこれを受けてそれぞれの海外ミッションが、任命された宣教師をそのミッションの所管地域のどの場所に赴任させるかを決定した。このような方式は十九世紀の間はうまく機能したが、女性宣教師の職種の専門化が進み、ミッションでの仕事そのものが分化して、専門化してくると、ひずみが出てきて、十九世紀末には、時代に即応できなくなった。

三つのウーマンズ・ボードは仕事の重複をできるだけ避けるため、宣教地での特定の学校や病院といった宣教機関について概ね担当するボードが決められていた。しかし宣教師の派遣についてはたびたび特定の宣教機関を担当するウーマンズ・ボードとその宣教機関に赴任した女性宣教師の支援母体であるウーマンズ・ボードが異なるという事態もおきていた。

例えば、神戸女学院は一八七四年中部ウーマンズ・ボードの担当とされたが、その宣教師は長らく東部ウーマン

ズ・ボードと中部ウーマンズ・ボード両方から派遣されていた。そのような不一致は、当初は問題にならなかったが、一九〇〇年代には宣教師を派遣するウーマンズ・ボードの意図とその宣教師に与えられた任務が反するようなこともおきてきた。このような不一致については、中部ウーマンズ・ボードや東部ウーマンズ・ボードでは、賛否両論に分かれた。エミリー・A・ホワイト・スマスは一九〇七年二月の東部ウーマンズ・ボードのラムソン宛の手紙の中で、「より広い見識をもつ教職員を得ることができて、重大な利点だと思った」と伝え、学校の長をその学校を支援するウーマンズ・ボードが派遣する原則さえ守っていればむしろ良いことと評した⁽³⁶⁾。これに対し、東部ウーマンズ・ボードのE・ハリエット・スタンウッドは否定的で、同年同月、たとえば、神戸女学院については、「われわれの支援する学校とは一般的に違う原則で運営されているようだ」と伝え、目的の異なる宣教機関へ自分たちの支援する宣教師を派遣する難しさを示唆した⁽³⁷⁾。

メアリー・A・ホルブルックが一九〇七年二月に神戸女学院へ再度赴任する許可を申請したとき、学校組織の経営母体と宣教師の支援母体を一致させる必要性が表面化した。ホルブルックは東部ウーマンズ・ボードに支援されている宣教師だったが、一九〇七年に再度赴任申請をすると東部ウーマンズ・ボードとアメリカン・ボードは健康上の理由からこれを拒否した。結局、ホルブルックは、学校の現状を熟知している中部ウーマンズ・ボードに所属を変えて、再度の赴任を実現した。ホルブルックが病気のため神戸女学院を去って以来、理学部は閉鎖されていて、医学の専門知識を持ち、新たな日本語修得を必要とせず、即戦力となるホルブルックの赴任は必須であった。「この(生物)学部を失ってしまうことは、学校の評判と影響力にとって決定的な痛手となります。」とエミリー・A・ホワイト・スマスは東部ウーマンズ・ボードのケート・G・ラムソンに伝え、理解を求めた⁽³⁸⁾。この事件は、東部ウーマンズ・ボードやアメリカン・ボードとの摩擦は避けたい中部ウーマンズ・ボードを当惑させたが、神戸女学院の学校事情に精通

している中部ウーマンズ・ボードのみが、ホルブルックの健康問題と学校の必要性を天秤にかけて判断できたことを示したといえよう。

現地の宣教機関とそこに派遣された宣教師の支援母体の不一致問題をきっかけとして、ミッションのなかで宣教師の任地を決める際に中部ウーマンズ・ボードはその裁量権を主張するようになった。アメリカン・ボードは宣教師志願者の中で、技術や知識の専門化が進んでいるのを重くみて、一九〇八年四月に次のような声明文を回覧した。

学生ボランティアは宣教の仕事の細部に到るまで……勉強しており、多くの場合特定の職種に就くため、準備を積み重ねている。その専門教育を活用できる任務を確保できなければ、彼らを失ってしまう危険がある。⁽³⁹⁾

アメリカン・ボードは宣教師を特定の地における特定の仕事に配分するためには、ミッションに完全に裁量権が委ねられている従来の方法を緩和する必要があると認めなければならぬ。完全にその裁量権をミッションから支援母体であるボードに移すことには消極的であった。したがって、この回覧には、次の点が付加された。

特権をボードに渡そうとするものではない。ミッションが宣教師の派遣を求めた任務に、適正な資格をもつ宣教師をみつけたら、ミッションにボードが協力するということである。

しかし、中部ウーマンズ・ボードはこのようになまぬいアメリカン・ボードの態度を不服とした。一九〇八年四月M・D・ウィングゲートはアメリカン・ボードのJ・L・バートンのこの回覧文に対し、この回覧文のコピーを添付の上、次のように抗議した。

一般的にミッションがその仕事に責任を負うことについては、同意しますが、私たちは、その仕事を支援するボードも認められ、発言できる場合があると今なお思います。

さらに語気を強めて、このように伝えた。

本国で支援するボードには自分の判断を表す権利が与えられず、またその判断がミッションによって、全く考慮の対象にされる必要がないというのは、断じてあってはならないと私どもは今なお信じています。⁽⁴⁾

中部ウーマンズ・ボードが抗議したのは、中部ウーマンズ・ボードの同意なしに、女性宣教師が、ミッションの決定により、その専門知識と無関係の仕事を配分されたり、中部ウーマンズ・ボード以外の仕事に着任することが、度重なっていたからである。ウインゲートは「ふたりの専門の看護婦であるキャリー・ベルとK・E・マイヤーズは中部ウーマンズ・ボードの支援でインドに派遣されたが、ミッションの決断により、病院ではなく、学校に赴任した」と、そして、中部ウーマンズ・ボードからブルガリアのサモコフに派遣された「メアリー・ハスカル」は中部ウーマンズ・ボードの仕事とは全く異なる、「モナスチール孤児院」にミッションによって任命された例を引いて、アメリカン・ボードの声明文に下記の文を付加するよう要求した。

独自の女性の任地を半永久的に変更したいとミッションが望む場合、その女性の支援に責任を負っているボードにこれを知らしめ、同意を得られない限り、最終行動をとることはできない。⁽⁴⁾

さらにウインゲートは中部ウーマンズ・ボードの宣教師の任地裁量権について、明文化を主張した。

もし中部ウーマンズ・ボードに宣教師を募り、任地を決める権利等があるのなら、なぜそう書かないのですか。……もし中部ウーマンズ・ボードの宣教師は一般的に中部ウーマンズ・ボードの学校に配置するべきならば、なぜそう明記しないのですか。⁽⁴⁾

こうした論議を経て、事実上、宣教師の任地について、中部ウーマンズ・ボードの発言権が認められるようになっていったのである。実際一九一一年七月には、日本ミッションの議決をくつがえす行動をとった。

中部ウーマンズ・ボードは、「ミス・コウは、新潟のミス・エディス・カーチスのもとに派遣されることを推薦する」という日本ミッションの議決を拒否し、「中部ウーマンズ・ボードの担当である神戸女学院に派遣されない限り、ミス・コウを、日本に派遣することはできない」と議決した。⁽⁴⁵⁾十一日後、ウィンゲートは「当委員会は、彼女（ミス・エステラ・コウ）は日本の神戸女学院へ派遣されるべきだと議決しました」とアメリカン・ボードへ報告した。⁽⁴⁶⁾コウは二年間神戸女学院（ソールの南舎任人リストによれば、一九一四から一九一六の二年間神戸女学院に滞在したことになる）で教師を務めた後、東部ウーマンズ・ボードに所屬を移し、本人とその友人の希望でかつて日本語修得のため滞在した鳥取で伝道活動に従事することとなった。そして本件の任地変更が議案に上った有馬での日本ミッションの会議に、中部ウーマンズ・ボード会長のクラーク夫人がたまたま同席していたため、その場ですぐ同意をとりつけることができたのだった。この時点では宣教師の任地決定権は実質的に中部ウーマンズ・ボードに移っていたことを示している。⁽⁴⁵⁾

このように一九一〇年代初頭の中部ウーマンズ・ボードとアメリカン・ボードの書簡を見る限り、担当する宣教師の任命や帰国休暇の許可についても中部ウーマンズ・ボードが、実質的な裁量権を掌握していた。たとえばウィンゲートは一九一〇年三月ミス・ウエルプトンにさらに四カ月の帰国休暇の延長を議決した旨をアメリカン・ボードに報告した時でも、アメリカン・ボードは、中部ウーマンズ・ボードの決定事項を尊重しつつ、折々にアドバイザーのよう⁽⁴⁷⁾に助言する程度であった。神戸女学院への宣教師候補について、バートン書記は、一九一三年六月、「ミス・ルパートについては、健康面を少々検討した方がよさそうです。」とコメントし、別の手紙では神戸女学院の宣教師の候補に、「京都のオーテイス・ケリー博士の娘、ミス・アリス・ケリー」を提案した。この案については、「もちろん強く推薦しているわけではなく、ミス・ケリーを使いたいと貴ボードがお考えになるかもしれないので、単にその機

会が得られるよう、情報を提供しているだけです。」と中部ウーマンズ・ボードの意向への配慮が窺える。このように中部ウーマンズ・ボードは形式的には依然として、アメリカン・ボードの運営委員会の承認を受ける必要があったものの、宣教師の任命、任地の決定そして帰国休暇の許可については、実質的な決定権を掌握していたのである。

もう一つの争点となったのは、独身女性宣教師の結婚問題である。独身女性宣教師の海外ミッションでの結婚により、中部ウーマンズ・ボードが戦力を失う問題が多発した。これに対し、中部ウーマンズ・ボードはささやかな自衛手段として、「もし独身女性宣教師が、ボードの外部の人間と結婚するか、あるいは、何らかの理由で五年以内に自発的に退職した場合には、彼女の衣料と渡航費はボードに返済されるものとする。」という規則を作った。⁽⁴⁷⁾（一九〇一年七月）アメリカン・ボードは、この問題の原因を独身女性宣教師が、「相手の教派にかかわらず、適当な男性がいると安易に結婚してしまう」ことにあるとし、派遣する費用を負担したボードに損害を与えた独身の女性宣教師を批判した。⁽⁴⁸⁾このことによって、もともと軽視していた独身の女性宣教師に対して、仕事への責任感を欠如するものとしてますます不信感を募らせたのである。さらにアメリカン・ボードの国内担当のバートン書記（Home secretary）は、インドに赴任している独身女性宣教師と会い、「ほとんどが不幸な状態にあること」から、やはり、独身の女性宣教師には、「肩幅が広く、幅広の胸で、頭が大きく、首が太く、容貌は博愛に満ちた感じだけれど、不器量な、典型的な old-maid」を任命するに限るとバートン書記に伝えたという。⁽⁴⁹⁾

中部ウーマンズ・ボードは二つの点からこれを論駁した。「独身の女性より、既婚の男性や女性の方が人間的な問題を抱えていることが多いです」とウィングートは反論した。ウィングートは「私たちは子供をもつ宣教師夫人と違って全然苦勞がありません」という独身宣教師の手紙を引用して、家事育児の負担がない分、独身の女性宣教師は、

中部ウーマンズ・ボードにとって、むしろ宣教活動を支える重大な投資であり戦力であると主張した。さらに、結婚相手がYMCAやアメリカン・ボードの宣教師であることが多かったので、この損害の原因は、女性の宣教師にあるのではなく、むしろ「アメリカン・ボードが独身の男性を私たちのミッションへ送り続けるのが間違いなのです。」と抗議した。(一九一一年八月)フロレンス・A・フェンシャムは、ウィンゲートの代理として、この点に続けて、「公平に解決するには、その(結婚する)若い女性の宣教師が赴任して二年に満たない場合、アメリカン・ボードが既に支払われた給料の半分を返納するべきです。」と訴えた。

この女性の宣教師の結婚問題は、微妙で難しい問題であった。そもそも女性の海外宣教の仕事は女性の「家庭性」の延長線上にあるという根拠で正当化されていたので、エミリー・A・ホワイト・スミスが「宣教師の結婚についての反対意見は聞いたことがない。」と一九一五年八月に記したように、中部ウーマンズ・ボードとしては、宣教師の結婚を否定することはできなかった。そして最低限の経済的補償以上の方法で問題を解決はできなかったのである。

四 結 語

設立から運営、事業の発展の過程で中部ウーマンズ・ボードは女性を中心に積極的に宣教活動を展開した。その過程でアメリカン・ボードから、自立性を高め、実質的な権限を拡大していった。このような中部ウーマンズ・ボードの女性たちの自立への意欲に、アメリカン・ボードは閉口していたようである。

一九一一年三月一日付けのアメリカン・ボードのバートン書記からボストンの東部ウーマンズ・ボードのチャール

ズ・H・ダニエルズ夫人宛の手紙は次のように伝える。

二月二十四日付けの貴信のなかで、現地ミッションで東部ウーマンズ・ボードの宣教師とアメリカン・ボードの宣教師の間だけではなく、さまざまにウーマンズ・ボードに支援されている宣教師とミッション全体の間で一体感と協力関係を築けるように、責任のある組織として、一般的に努力していると書いていらっしやったことについて、大変な関心を寄せて、読みました。……私たちは、常にシカゴのわれわれのよい姉妹達(中部ウーマンズ・ボード)との間で、きまり悪い関係に追い込まれているのです。というのは、彼女たちはミッションの決議に従いたがらないからです。もし彼女たちが仕事の一致を認識し、進んでそれに応じて行動してくれるれば、当方とミッションの緊張が大いに取り除かれるのです⁽⁵⁵⁾。

このような中部ウーマンズ・ボードとアメリカン・ボードの間に芽生えてきたひずみは、一九〇〇年のエジンバラでの世界宣教会議で国際的な議案として発議され、一九一〇年代以降急速に高まった女性宣教師団体の男性宣教師団体への統合論争に組み込まれていったのである。⁽⁵⁶⁾

註

なお引用文中の括弧、太字は引用者による。

(1) 「米国西部のダコタ地方」とは、North Dakota 州と South Dakota 州。政府保留地にいるインディアンの、アメリカ化政策の一環として、プロテスタントの宣教師が教育等を通じて、キリスト教への改宗をめざす教化活動を行った。「A Panorama of Progress: The Story of the Fifty-Eight Years of the Woman's Board of Missions of the Interior in Pan-tomime and Picture, "Papers of the Woman's Board of Missions of the Interior, 1868-1955." ハーバード大学ホートン図書館所蔵、以下略称 WBMI-ABC FM Papers.

(2) アメリカの女性宣教師団体についての先行研究として発行年代順に以下が挙げられる。アメリカ女性の二八〇二年から一九六八年までの宣教師活動全般を包括的に網羅する歴史研究として、今なお多用されている古典である R. Pierce Beaver, *All Loves Excelling: American Protestant Women in World Mission* (Grand Rapids, Michigan, 1968) 主としてペンシスト監督派、長老派、会衆派(アメリカン・ボード)の女性宣教師団体発行の機関誌で用いられたレトリックを分析して、女

性の宣教活動の根拠となっているイデオロギーの変遷を明らかにした Patricia R. Hill, *The World Their Household: The American Woman's Foreign Mission Movement and Cultural Transformation, 1870-1920* (Ann Arbor, 1985) アメリカの女性宣教団体の成立事情を概観した百田徹子「アメリカにおける婦人外国伝道協会の成立」『アメリカ史研究』10(一九八七年)、四〇―五五頁がある。一八七〇年から一八九〇年までの特にフィラデルフィアに本拠地をもつ長老派婦人伝道局については、小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師来日の背景とその影響』(東京大学出版会、一九九二年)第二章が詳しい。本稿では、こうした先行研究を踏まえながら、事例研究として、アメリカン・ボードの中部ウーマンズ・ボードをとりあげ、これまでとりあげられることのなかった、親組織であるアメリカン・ボードとの関係の変化という側面に焦点をあてるものである。

(c) WBMI, "Missionary Papers No. 9," Nov. 1868; WBMI, "The Annual Reports of the WBMI, 1870-1910," インター・ハーバード神学大学図書館所蔵。

"Papers of the Woman's Board of Missions", ハーバード大学ホートン図書館所蔵、以下略称 WBMI-ABC FM Papers, 上掲 WBMI-ABC FM Papers.

(4) この時期に集中した理由は南北戦争後の米国の社会情勢と無縁ではない。アメリカン・ボードの女性の組織として、ポストン、シカゴ、西海岸と三カ所にウーマンズ・ボードが結成されたのは、十九世紀のアメリカ女性史の流れの一環であったと言えよう。この時期盛んになったウーマンズ・クラブ運動を説明したアメリカ史家カレン・J・フレアは、「一九世紀の中流の白人女性達は、女性の領域が家庭生活に限られていることにあきたらず、家庭の外にエネルギーのはけ口を求めた。自分たちの周囲の世界に何らかの働きかけをするため、女性同士で組織をつくり、その結果、数多くのウーマンズ・クラブを作った。」と分析している。(Karen J. Blair, *The Clubwoman as Feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914*, New York and London, 1980, 99, 117-118.) 同様に、一八三〇年代以降アメリカ東北部において、急速に創設された女子セミナリーで教育をうけた第一世代の白人中流女性たちは、女子教育その他の方法でキリスト教を世界に広めるという海外宣教の仕事に女性の特質を公的領域に活かす一つの大きな機会を見出したと考えられよう。海外宣教の仕事は、歴史家パトリシア・R・ヒルによれば、「十九世紀末の最大の女性の大量運動で一九一五年までに三百万人以上のアメリカ女性を動員したものとす。」(Patricia R. Hill 上掲書、1985, 2-3, 8, 195n. 1)

なお、海外宣教の仕事は、南北戦争前後に発祥し、アメリカの中流白人女性にとって女性らしい職業として容認された教

師、看護婦、医者とならんで、バーバラ・ウェルターの指摘した十九世紀アメリカの中流白人女性のあるべき女性像の四つの資質である、純潔・敬虔・従順・家庭性のうちの「家庭性」(domesticity)を活かす仕事としてごく自然に入りやすい仕事であった。その上、海外宣教の仕事は「敬虔」の延長線上に位置するものであった。宗教は女性の領域と広く認められ、また神の理想に近付くように、女性が宗教活動に積極的関わることは高く評価されていたので、教会活動の一つとして、海外宣教のための女性の献金活動は、十九世紀初頭から行われていたのでも、(Barbara Welser, "The Cult of True Womanhood," *American Quarterly* 18, Summer 1966, 151-74. Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Women's Sphere" in New England, 1780-1835*, New Haven, 1977. 華藤とくよびと拙著 "American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909," *The George Washington University 提出博士學位論文*、一九九八年、第一章、第二章参照。

- (5) 一番古く記録は、一八二二年二月五日の Rev. Jonathan Allen の *おひきき*。R. Pierce Beaver '上掲書' 五一。
- (6) この数字が一名合わなごの、後結婚した一名が合わなごにならぬ。R. Pierce Beaver '前掲書' 五九一七一。
- (7) 著者不明 *Nathaniel George Clark Memorial: Twenty-nine Years Corresponding Secretary of ABCFM* (Boston, 1897), 18-19. 神戸女学院大学図書館所蔵。
- (8) Grace T. Davis, *Neighbors in Christ: Fifty-Eight Years of World Service by the Woman's Board of Missions of the Interior*. (Chicago: Congregational and Christian Churches, 1926), 5.
- (9) Fred Field Goodsell, *You Shall Be My Witness: An Interpretation of the History of the American Board 1810-1960* (1959), 157.
- (10) Davis '上掲書' 八一九。
- (11) N. G. Clark, "A Retrospect," (「回顧」) アメリカン・ボードの年次総会、ウイスコンシン州マディソン、一八九四年十月十一日に発表した論文、著者不明 *Nathaniel George Clark Memorial* 上掲書、一一六—一七頁。
- (12) WBMI, ed. *Second Annual Report of WBMI, 1870*.
- (13) 一八七一年より一九〇六年まで会長職を務めた。エッリー・A・ホワイト・スミスは女性の地位向上に強い信念を持ち、本稿で述べるような中部ウーマンズ・ボードのアメリカン・ボードからの自立性を強力に押し進めた中心人物である。スミスの生い立ち、思想、及び果たした役割については上掲拙論第二章参照。

- (14) Emily A. White Smith to Mrs. Peabody, "Reminiscences of 50 years of WBMI," Chicago, 15 April 1918, 3, WBMI-ABC&M Papers.
- (15) クラークが当時の一般通念に比し女性の家庭外での宣教活動を積極的に評価するような、開明的な女性観を持ち合わせていたのだろうか。これについては推測の域を出ないが、以下のような要素から育まれたものかと推察できる。クラーク自身幼少時、祖母や母から多少とも宗教的感化を受けていたこと、書記に就任する前から、女子教育にも関心を寄せ、ウェズリーやメソジスト・ホリオーク等複数の女子の高等教育機関の理事を務めていたこと、宣教師との書簡のやりとりの中で窺われるのは、現地のニーズに鋭い感性をもち、そのニーズに応じることには前向きであったことである。従って、海外宣教の仕事に弾みをつけるために、内外の需要に鋭敏に反応して、女性を活用し、現地の女性の感化を図ったと推理できよう。幾つかの手がかりからクラーク夫人の影響が考えられるが、この点については今後さらに検討が深められる必要がある。
- (16) Charlotte B. DeForest, *History of Kobe College* (Kobe, 1950), 16.
- (17) *Ibid.*, 二九—三三頁。註二は上掲書籍第五章参照。
- (18) "It was voted, that a Woman's Missionary Society should be formed in Chicago to co-operate with the American Board, & having for its special object the diffusion of missionary intelligence, and the kindling of interest & enthusiasm through the wide extent of our Interior States." 上掲書籍 "Missionary Papers No. 9" November, 1868.
- (19) "Art. 1. The object of this Society is to engage the earnest, systematic co-operation of Christian women in sending out and supporting unmarried female missionaries, and native teachers and Bible readers to heathen women through the agency of the American Board." *Ibid.*
- (20) "The work is one in which, more cordially perhaps than in any other, all Christians can unite. We would provide a channel through which may flow, from the large hearted women of the West, a tide of blessings to their sister in foreign lands, who have given up all for Christ, and to those degraded beings—still our sisters in God's sight—who are bound in the heavy chains of ignorance and heathenism." *Ibid.*
- (21) 一八七五年にアメリカン・ボードが中部諸州(インディアナ、イリノイ、ミシガン、ウィスコンシン、アイオワ、ミネソタ、ミズーリ、カンザス、ネブラスカ、ダコタ諸州)から受け取った集金額三万八千二百四十九セントの内、中部ウーマンズ・ボードの集金総額は、一万九千七百五十八ドル一七セント(約五一・九六%)であった。WBMI, *The Seventh Annual*

Report of WBMI, 1875.

- (22) 上掲論文 “A Paronama of Progress.”
- (23) R. Pierce Beaver’ 上掲書’ 三二頁。
- (24) Emily A. White Smith to Mrs. Peabody, “Reminiscences of 50 years of WBMI,” 15 April 1918, Chicago, WBMI-ABC FM Papers, 3-5.
- (25) Ibid., 3.
- (26) 女性を「頑強なオークの木(男性)にまといつく、この植物」(the vine clinging to the sturdy oak)とみなせる比較は、女性の仕事は、男性の仕事に付属して補足するものだと女性を説得するためにアメリカン・ボートの男性幹部の間で広く使われたたとえで、二十年以上後の一九〇〇年にも宣教師活動の代表的な女性スホークスマンだったクレン・ハンレット・キンクスリーが、このイメージを断固として拒絶した。Patricia R. Hill’ 上掲書’ 一一七—一二〇頁。
- (27) Grace T. Davis’ 上掲書’ 一五—一六頁。
- (28) *Life and Light*, Vol. VIII, No. 1 (January 1878), 10-13. 神戸女子学院大学図書館所蔵。
- (29) “Constitution of WBMI,” WBMI, ed. *The Annual Report of the ABCFM*, 1878.
- (30) このような状況のなかで当時の中部マーティンズ・ホーランドでは、「自分たちの活動は、男性の領域に踏み込むものではなく、女性らしい特質を活かしてキリスト教を非キリスト教国の女性に広めていくだけだ」と強調することが戦術的に重要であった。この点については上掲拙論第二章参照。
- (31) 上掲論文’ “Missionary Papers No. 9,” Nov. 1868.
- (32) Ibid.
- (33) R. Pierce Beaver’ 上掲書’ 九三頁。
- (34) Emily A. White Smith to James L. Barton, 19 October 1906, Chicago; 14 September 1911, Chicago, WBMI-ABC FM Papers.
- (35) M. D. Wingate to J. L. Barton, 13 June 1908, Chicago, WBMI-ABC FM Papers.
- (36) Emily A. White Smith to Kate G. Lamson, 15 February 1907, Chicago, WBMI-ABC FM Papers.
- (37) E. Harriet Stanwood to Sarah Pollock, 26 February 1907, Boston, WBMI-ABC FM Papers.

- (88) Emily White Smith to Kate G. Lamson, 15 February 1907, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (89) "Enclosure: Statement formulated by Secretary J. L. Barton," in M. D. Wingate to J. L. Barton, 9 April 1908, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (90) M. D. Wingate to J. L. Barton, 9 April 1908, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (91) *Ibid.*
- (92) M. D. Wingate to J. L. Barton, 11 April 1908, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (93) M. D. Wingate to E. F. Bell, 24 July 1911, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (94) M. D. Wingate to E. F. Bell, 4 August 1911, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (95) Arthur W. Stanford to Kate G. Lamson of WBMI, 15 December 1915, Kobe, WBMI-ABCFM Papers.
- (96) E. F. Bell to M. D. Wingate, 26 May 1914, Boston, WBMI-ABCFM Papers.
- (97) M. D. Wingate to Mrs. C. H. Daniels of WBMI, 20 July 1901, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (98) Valentine H. Rahe. *The Home Base of American China Missions, 1880-1920* (Cambridge, London, 1978), 82.
- (99) J. L. Barton to Kate G. Lamson, 28 March 1911, Boston, WBMI-ABCFM Papers.
- (100) M. D. Wingate to J. D. Barton, 1 April 1911, 13 April 1911, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (101) M. D. Wingate to J. D. Barton, 4 August 1911, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (102) Florence A. Fensham (WBMI) to J. D. Barton, 24 August 1911, Chicago, WBMI-ABCFM Papers.
- (103) Emily A. White Smith's letter, 15 August 1915, in Charlotte B. DeForest 譯『ヤーヤ・クック米人』コマンタンパ
 ター 1011頁。津田大祐監訳 津田大祐 監訳 監訳。
- (104) J. L. Barton to Mrs. Charles H. Daniels (WBMI), 1 March 1911, Boston, WBMI-ABCFM Papers.
- (105) 上掲 津田大祐 監訳 津田大祐 監訳。